

序章 - ボールを手で扱うということ -

ボールで遊ぶ面白さを知った人間は、スポーツとしてフットボールを作り、さらにボールを蹴ることに、持って走ることを加えた競技を創造しました。蹴るだけでなく、目の前にあるボールを持って走った方が有効であると直感したとき、あるプレイヤーが、ルールを超えてボールを手にしました。競技中のプレイヤーたちは、彼を詰問するよりも共感を覚え、ボールを持って走ってもよいという申し合わせをしました。ボールを持って走ることが加わったスポーツの歴史的・劇的誕生です。

ボールを持って走ると相手が捕まえにきます。相手の防御によって、持って走るだけでは目的地に到達できないとき、チームメイトにボールを渡して攻撃を引き継いでもらおうとするのは当然且つ必要なことです。そこで、一人二人と手渡していくプレーが工夫されました。

相手が捕まえに来て易々と捕まらないようにしたり、捕まってもボールをパスしようとするために、激しくぶつかるようになり、組み打ち (scrummage) も多くなりました。ラグビーといえば、激突、激闘という言葉がついて回り、格闘技であることがしばしば強調されます。確かにラグビーでは身体をぶつけ合ってボールを取り合いますが、ぶつかりながら running と handling の技能を駆使して得点を競う競技です。running と handling はラグビーの面白さの要素で、楽しむためにも、試合で勝つためにも、最も重要な課題なのです。それらの要素をプレーとして、戦い方の要領として言葉にしたものが、展開・継続とスピーディなのです。

ゲーム発祥 200 周年が目前です。一つの卵型のボールを追って多くの人々がラグビーを楽しんできました。プレイヤーとその家族、街の人々、学校でそしてクラブで、愛好者たちは工夫を重ねてすばらしい競技に育て上げてきました。グローバルに、イングランドから世界中に広まりました。その間、より楽しくするために、ルールを作り、公平・展開・安全をモットーに改正を繰り返されました。

最近非常に重大なルール改正がなされました。プレイヤーが、地上に倒れたままの状態プレーすることが許されないのは、絶対的なことでした。寝ころんだ状態でプレーするのは、フェアでなく、踏まれたりしても責任は自身にあるという観念でした。禁止しなければ危険であり混乱を招く元になるからです。

しかし、現代ラグビーはハンドリングゲームとして進化する過程で、この根本的なことをも改革しました。タックルされた状態で、「直ちに」することを条件に、パスをしてよいし、地上のボールを押し動かしても良いということになりました。徹底的にハンドリングによってプレーの継続を追求していくことが、ラグビーのめざすところであり、面白さの根源であるという認識からです。そこで、正当にボールの後方からラックに入った arriving player であっても、ボールを越えて地上に倒れたならば、プレーの継続を阻害したということで反則とするレフリングがなされるようになってきています。

ルールを守るということは、そのルールが目指しているところを理解して、ルールが生きるようにすることであって、(何もわからないけれども)決められたのだから仕方なく従うというのでは、プレーに差が出てきます。形だけルールの言葉通りにしても、人間の行動に差ができて、小さな相違が集まって大きな差となって拡大し、似て非なるものになってしまうのです。

最近のゲームで言えば、日本代表の公開セレクションマッチと、スーパー12のブランビーズのゲームを比べてみれば明白でしょう。継続とスピードのグレイドの違いが目につき、原因となるハンドリングについての意識の遅れが感じられます。改めて 再生 running handling game への方向付けの必要性が痛感され、全てのチームの練習や指導の内容の検討に生かされることが望まれるのです。全てのチームといったのは、これは代表チームだけの問題ではなく、ラグビー人口の裾野の広さと頂上を盛り上げるエネルギーの問題だからです。新生日本ラグビーの目覚ましい発展を願うとき、プロ化だけではだめなのです。

ルールを読めば、まず、現在の猪突猛進型でボールを離さないラグビーから脱皮しなければならないことに気付くでしょう。ルールの第7条に競技法にも当然いろいろな handling が挙げられていますし、handling が継続するようになっています。

即ち：

第7条

- ・ボールを捕り、持って走る
- ・ボールを投げる
- ・ボールを与える
- ・ボールに倒れ込む（地上のボールに falling down して直ちに処理する）
- ・ボールをグランディングする

第14条

地上に横たわっているプレーヤーにはしてはならないこと。

第15条

タックルされたプレーヤーは、継続のためプレーできるようにしなければなりません。

パス、手離す、立ち上がる、離れる、いずれかの方向に置く、地上でボールを押し進める（前方でなく）

タックラーはタックルされたプレーヤーを直ちに離さなければならない。

以上のように、ハンドリングを継続して、ルールを活かせばプレーは継続する筈ですが、多くのゲームの現状を見ると、ルールが十分生かされていないと言わざるをえません。ルールの一貫性を理解せず、バラバラに解釈するものだから、方向違いのものになってしまっているのです。「激闘・ぶつかり合い」という言葉に酔ってはいけません。防具をつけてぶつかるアメフトと違って、ボールを取り合うときに身体が触れるということであって、触れないでボールを確保できれば一番よいわけです。組み合って押しあうスクラムも、ボールを入れる前にポイントを超えて押せば反則です。相手に体重をかけていることが有利だから、押すように指導されるのですが、それはゲームの一瞬であり一端であって、所詮、ハンドリングで勝負を決する競技です。ラインアウトも、ボールを捕るために跳び上がり身体が触れるのはしかたないところですが、ボールをもったプレーヤーを回りのプレーヤーがバックして一団となって相手に当たるのは反則です。当たり合いそのものと見えるタックルも、ボールをもっている相手をいかに捕まえるかというプレーで、相手の展開継続を阻止するために、いかに捕まえるかが問題であって、強く当たって相手をやっつけるだけのプレーではありません。

新生日本ラグビーを考えるに当たって、日本人の特徴を生かすことは大切ですが、日本人に合っていさえすればよいというものではありません。ラグビーの原点をしっかりとふまえ、日本人の身体的劣性を克服し、長所を生かし、そして後進性を排することから、現状の追隨に留まらず、現代ラグビーが目指している先を追求することこそが重要であることは言うまでもないことです。章を分けてキーワードをもとにキーファクターを抽出していきましょう。